

美しく生まれたばかりに

小川未明

青空文庫

さびしい、暗い、谷を前にひかえて、こんもりとした森がありました。そこには、いろいろな小鳥が、よく集まってきました。秋から、冬へかけて、そのあたりは、いつそうさびしくなりました。森は陰気な顔をして、黙っていました。そのとき、眠りをさませるように、いい声を出して、こまどりが鳴きました。

これを聞くと、森は、元気づいたのです。

「あの美しいこまどりがきたな。どうか、この森に長くおつてくれればいい。」と、木立は思ったのでした。

多くの木立は、自分の枝へ、毎日のようにくるたくさんの小鳥たちを知っていました。しかし、どの鳥も、こまどりのように、

うつく
美しく、そして、いい声をだして鳴くものがなかった。

「どうか、私の枝へきて、こまどりは止まってくれないものかな
。」と、一本の木立は、考えていました。

ちようど、そのとき、そこへ飛んできたのは、やまがらと、し
じゆうからでありました。

「たいへんに、寒くなりましたね。嶺を吹く風は身を切るよう
す。しかし、この森は、奥深いから、いつ雪になっても、私
ちは、安心ですが……。」と、鳥たちは、話をしていきます。

木立は、それを聞くと、自分も、じつに寒くなったように身震
いをしました。

「しじゆうからさん、山のあちらは、暴れていますか？　そうい

えは、もう雲ゆきが速くて、すっかり冬ですものね。また、雪の中なかにうずもれることを考えると、まったく、いやになってしまいます。あなたたちは、しあわせものですよ……。」と、しみじみとした調子ちようしで、木立こだちは、いいました。

やまがらは、その枝えだで、一度どもんどりを打ちうました。

「私わたしたちがしあわせだって？ ……それはちがいますよ。一日いちにち、風かぜに吹ふかれて駆かけまわっても、このごろは、虫むし一匹びきみ見つからないことがありません。それに、これからは、雨風あめかぜに追おわれて、あちらへ逃にげ、こちらへ逃にげなければなりません……。」と、やまがらは、答こたえた。

「だって、そうして、自由じゆうに空そらを飛とべるのじゃありませんか。私わたし

たちは、永えいきゆう久きゆうに、ここにじつとしていなければならぬ運うんめ命いにあります。こうして、毎まいにち日おな、同じような谷たにがわ川おとの音きを聞きいていなければなりません。先せんこく刻こくでしたか、こまどりさんの歌うたを聞ききました。が、いつも、よい声こえですね。」と、木こだち立たちは、うつとりとしていいました。

「ほんとうに、あのこまどりこそ、しあわせ者ものです。どこへいつても、森もりや、林はやしに、かわいがられます。森もりじゆうの木こだち立たちが、どうか自分じぶんの枝えだにきて止とまってくれればいいと思おもっている。私わたしたちが、せつかく、一夜やをそこにあかそうと思おもって止とまると、枝えだが意い地じ悪わるく、夜中よなかに、私わたしたちの体からだを揺ゆすって、振ふり落おとそうとする。それに、くらべれば、同おなじ小鳥ことりとうまれて、こまどりは、ほんとうに

しあわせ者ものであります。」と、二羽わの小鳥ことりは、口々くちぐちにいいま
した。

木立こだちは、さすがに、気恥きはずかしく感ぜかんずにはいられなかつたの
です。

「いえ、私わたしだけは、そんな意地悪いじわるではありません。だれでも、私
の枝えだにきて止とまってくだされば、ありがたく思おもっています。どう
か、こんなさびしい日ひは、よそへゆかず、ここにいて、いろい
ろごらんなされた、おもしろい話はなしをしてくださいませんか。」と、
木立こだちは頼たのみました。

このとき、風かぜが、またひとしきり強つよくなつた。やまがらは、驚おどろ
いて、飛とび立たとうとして、

「それよりは、わたしは、昨日、嶺のあちらで、はやぶさにねらわれた。もうすこしで捕らえられようとしたのを、いばらのやぶに逃げこんで助かったが、こうして、風が、ふいに吹くと、また、はやぶさにねらわれたかと思つて、びっくりする……。」「と、しじゆうからにいうとなく、独りで思ひだしていいました。

「ほんとうに、そうした話を聞くと、自由に空を飛べるあなたたちにも、いろいろな苦勞があるのですね。」「と、木立は同情しました。

いつしか、あたりは、暗くなつていった。そして、谷川の水が、あいかわらず、単調な歌をうたっているのが、あたりが、しんとすると、いつそうはつきりと聞こえてきました。

空そらを見ると、雲くも切れがしているその間あいだから、一つ星ほしが、大きな目めで下したをじつと見み下ろして、木立こだちに止とまっている小鳥ことりたちが、熱ね心に、風かぜに動うごく枝えだと話はなしをしているのに、耳みみを澄すまして聞きいていました。

「ねえ、空そらのお星ほしさま、ここに、いつもこうして、じつとして動うごけない私わたしたちと、このかわいらしい小鳥ことりさんたちと、どちらが、幸こう福ふくなものでしょうかね。何なに事ごとも、あなたは、わかっておいでなさると聞きいています。どうか、教おしえてくださいませんか。」

と、まだ、そんなに、この森もりの中なかでは年としをとつていない木立こだちが、快活かいかつに、星ほしに向むかってたずねました。

星ほしは、急きゆうに、問といかけられて、急いそがしそうに瞬またたきをしました。

それから、じつと態度を澄まして、おちついた調子で、

「地上に、すむものは、よいも、悪いもない、みんなの運命は同じなんです。」と、答えた。

すると、こんどは、小さなしじゅうからが、黙っていたいなかった。

「星さん、星さん、そうじやないでしょう。いい声のこまどりは、

どこへいっても、森や、林たちばかりでない、人間からかわ

いがられます。私は、ああいういい声を持って、美しく生まれて

きたものが、幸福だと思わずにいられません。」といいました。

木立は、しじゅうからの言葉に、しきりに同感をして、頭を

振っていた。すると、星は、いちだんと清らかな光を増して、大

きな目をみはったように、

「そう思うのも無理はありませんが、どうして、それが、終しゆうせ生の幸福こうふくだといわれますか……。そのためにいいこともあれば、また、悪いわることもある。空そらから、見みているとよくわかりますよ。」と、星ほしは答こたえたのです。

風かぜは、ますます強つよく吹ふいてきました。黒くろい雲くもがで、せつかく、のぞいた清きよらかな星ほしの光ひかりも、跡あと形かたもなくかくしてしまいました。

小鳥こどりたちは、ついうかうかとして、時ときのたつたのに気きづかなかつたが、まったく、暗くらくなってしまうと、おのおのの友ともだちのいるところを探さがして、あちらとこちらで呼よびかわしながら、森もりの深ふかくへはいつてゆきました。

「あ、明くる日の暮れ方のこと、雪がちらちらと風にまじって降っていました。こまどりは、ひとりいい声で、この木立に止まって鳴いていました。」

「ごらんなさい。あなたが鳴きますと、ほかの鳥たちは、みんな黙ってしまふではありませんか。たまに、こうして、あなたがたずねてきて鳴いてくださるので、私たちは、さびしい、こんな山中にいてもなぐさめられるのです。今夜は、雪になりそうです。晩は、この森の奥へは行って、お休みなさいまし。」と、木立がいました。

「きのうは、あちらの山にいつてみました。夕焼けが赤かったから、雪になろうと思つたのですよ。自分の唄が、西の空へ響くよ

うな気がしました。」と、こまどりは、自分の声を自慢したので
す。

「こまどりさん、ほんとうに、今夜にでも雪が積もったら、明日
は、あなたは、ふもとの方へ行ってしまわれるでしょう。そうす
れば、また、春がくるまで、あなたの歌を聞くことができないの
です。どうか、もう一つ歌ってくださいませんか。」と、木立は
たのみました。

こまどりは、寒い風に吹かれながら、谷の方を向いて、ほがら
かに、さえずりはじめました。このとき、あちらから、矢を射る
ように、黒いものが飛んできたかと思うと、こまどりは思わず、
すくんでしまった。それといっしょに、木立は、

「あつ！」といって、声をあげました。

はやぶさが、こまどりを狙つて、それを捕らえたからです。

なぜ早く、森の中へ、隠れなかつたかと、木立は、気をもんだけれども、はや、なんの役にもたたなかつた。

「はやぶささん、どうか、そのこまどりの命だけは、取らないでください。」と、木立は、はやぶさに訴えました。

「あまり、こいつが、いい気になって、自分の声を自慢するからさ。」と、はやぶさは、こまどりを片脚で押さえつけて、いいました。

「なにも、あなたに、悪いことをしたのでありますまい。私が、頼んで、唄をうたってもらつたのです。あまり、今日は、あたり

が陰^{いんき}気で、寂^{さび}しいものですから……。」「と、木立^{こだち}は頼^{たの}みました。

はやぶさは、目^めをくるくるさしていましたが、

「ほんとうに、寒^{さむ}い、さびしい日^ひだな。こんな日^ひには、小鳥^{ことり}どもも、目^めにつかない。こいつは見^みたところは、きれいだが、毛色^{けいろ}ばかりで肉^{にく}がまずいので、あまり俺^{おれ}は、好^すきでない。そんなに、おまえがいうなら、こいつの命^{いのち}だけは、助^{たす}けてやろう。そのかわり、こんど、小鳥^{ことり}が、ここへ飛^とんできたなら、おまえは、頭^{あたま}でも振^ふつて、俺^{おれ}に知^しらせてくれい。」と、はやぶさはいいました。

木立^{こだち}は、こまどり^{たす}が助^{たす}けられたので、うれしく思^{おも}った。しかし、はやぶさは、すぐに、こまどりを放^{はな}してやろうとはしなかったのでした。

「おまえの命は、助けてはやるが、今夜、一晩、こうして、俺の脚を温めさせろ！」といって、はやぶさは両脚で、こまどりの体を踏みつけたのでした。こまどりの体は、押しつぶされそうになって、声もたてられなかった。

木立は、なんとという残酷なことをするものだろうと、これを見るのにしのびませんでした。が、じきに、暗く、暗くなって、すべての光景を、夜が、隠してしまいました。

夜が、ほのぼのとあけかかったとき、木立は、こまどりがどうなったかを見ると、はやぶさは、もはや、そこにはいませんでした。あちらの嶺の方へ、早起きする小鳥たちの声を聞きつけて、これを捕らえて飢えを満たすために、飛んでいってしまった後で

す。そして、こまどりだけが、哀れげなようすをして、くちばし
 で、自分の体の毛の乱れを直していました。

木立は気の毒に思つて、声をかけることもできなかつたのでし
 た。

ちらちらと降つた、雪を清浄に照らして、朝日が上りました。

こまどりは、そうそうに、木立に別れを告げて、ふもとの方を
 さして急ぎました。その後へ、先日（せんじつ）のしじゅうからが飛んでき
 て、木立（こだち）からはやぶさところまどりの話を聞いて、小さなくびを
 毛（け）の中（なか）にすくめたのです。

「こまどりは、町（まち）へいっても、殺（ころ）されるようなことはありませんま

い。しかし、先日せんじつのお星さまほしのいったように、なにが幸福こうふくとなり、また、不幸ふこうとなるかもしれない。私わたしどものように、これからはめられるということのないかわり、自由じゆうに空そらを翔かけることができるのが、しあわせであるかもわからない。こんな皮かわと骨ほねばかりの私わたしどもを、はやぶさだつてねらいはしますまいから……。

「と、いったのです。

ちようど、このとき、こまどりは、平原へいげんの上うえを飛とんでいました。見みわたすかぎり、初雪はつゆきにいろどられて、白しろい世界せかいの中なかを、金色こんじきの帯おびのように、河かわが流かわれ、田圃たんぼは、獣物けだものの背中せなかのように、しまめを造つくっていました。

昼ひるごろのこと、こまどりは、地平線ちへいせんのかなたに浮うかび出でた、

華やかな町を見ました。

「まあ、なんとという輝かしい町だろう。人間がここに住んでい

るのだ……。山にいるとき、よくほかの鳥たちが、おまえさんは、

羽の色も美しいし、

声もいいから、

人間にもかわいがられるだ

ろうといったことがあった。もし、人間が、私をかわいがって

くれるなら、私は、どんなにしあわせかしれん……。」「と、こま

どりは、高い木に止まって、独り言をしていました。

町の建物は、日に輝いて、煙突から白い煙がおもしろそう

に、雪晴れのした、青い空に流れて消えていました。このとき、

すずめが、軒端の方から二羽飛んできて、こまどりの止まってい

る、下の方の枝に止まって、話をしていたのです。

「あの、美しいお嬢さんの家にいたのと、同じい鳥じやないか？」
この言葉を聞きつけた、こまどりは、すずめの方を見下ろしました。そこには、見慣れない二羽の鳥たちが、自分のうわさをしていたのでした。すずめは、山の奥にはすんでいなかっただからです。

「もう、一度、いまのお話を聞かしてくださいませんか。」と、こまどりはやさしく、いいました。

すると、すずめは、おしやべり者ですから、

「この町で、いちばんりっぱなお家なのです。そこのお嬢さんは、評判の美人ですが、あなたと同じ鳥が、このあいだまで、かわいがられて、飼われていたのですよ。それが、このごろ、逃げ

たとみえていなくなつたのです……。」「といたしました。

「それは、どのお家うちですか？」

「あの森もりの中なかに見えるみ、高い家たかうちが、それですよ。」

こまどりは、いいことを聞いたと思おもつて、すぐに、その家いえの方ほうへ飛とんでいった。そして、庭にわの桜さくらの木きに止とまつて、いい声こえを出だして鳴なきました。たちまち、窓まどが開あいて、美うつくしいお嬢じようさんが、顔かおをだしました。

「まあ、いいこまどりだこと、家うちのが帰かえつてきたのかもしれないわ。」といつて、お嬢じようさんは、きれいなかごの中なかへ、こまどりの好すきそうな餌えさを猪口ちよこに入れて、かごの戸とをあけて、木きの下したへだしました。

こまどりは、木の上で、これを見ながら、しばらく考えていたが、だんだん下へ降りてきました。そして、とうとうそのかごの中へはいると、くびをまわして、内のようすをながめました。このとき、お嬢さんが、飛んできて、戸を閉めてしまいました。

こまどりは、かごの中へはいつてから、なぜいままでのこまどりは、このかごの中から、逃げていったのだらうかということ、青空を見ながら考えたのです。すると、彼は、急に自由を失ってしまったことに気がついて、かごの中で、騒ぎはじめました。「すこし暗いところへ置いたほうがいいわ。」と、お嬢さんは、奥の座敷へ、かごを持ってきました。こまどりは、はじめて人間の住む家の内を見るので、珍しそうに見まわしていました。

そのうちに、またたちまち悲鳴ひめいをあげて、狭せまいかごの中なかで狂くるい出だした。あちらで、はやぶさが、こまどりをにらんでいたからです。しかし、それは、床とこの間まにかかっている、掛かけ物ものの絵えであることとがわかりました。そして、この小ちいさな鳥とりにも、人にんげん間は、なんでも人にんげん間いがい以外いがいのものをおもちやにするが、めつたに幸こう福ふくを与あたえるものでない、幸こう福ふくというものは、自じ分ぶんだけの力ちからで得えられるものだと悟さとると、いままでいろいろと目めに描えがいた美うつくしい空くう想そうは消きえてしまった。

こまどりは、やはり、怖おそろしいはやぶさのすんでいる、山やまの中なかが恋こいしくなりました。そして、いまとなつては、とりかえしのつかない、自じ分ぶんのはやまった生せい活かつを後こう悔かいしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月20日

※表題は底本では、「美《うつく》しく生《うま》まれたばかりに」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

美しく生まれたばかりに

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>